

授業形態	講義	科目名	解剖生理学	必選区分	必修
開講学科・学年	大護1年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他（ ）			
どのような方法を取り入れたか	<p>①学部在所蔵されている人体模型を、講義で使用している。</p> <p>②解剖アトラスのCGを授業で使用している。</p>				
取り組みの効果	<p>①テキストの平面的な絵に比べて、より3次的に理解できているようだ。</p> <p>②スクリーンに映写できるので、全ての学生に見せることができる。またテキストの絵や模型では困難な、「様々な角度から立体的に見せる」「筋肉が骨格に付着する場所を見せる」といった工夫が可能になった。</p>				
今後の課題	<p>①模型は1体だけなので、学生全員が体験できるわけではない。とくに後方の学生には見えにくい。講義以外の時間にも、学生が模型で学習することができるような環境が必要と思われる。</p> <p>②模型の欠点を補填するためにCGを使用しているが（iPadを使って）、講義室のスクリーンが1つしかないので、講義のスライドとCGを同時に映写することができない。 →この点については学部事務室で別途スクリーンと液晶プロジェクターを用意していただいた。</p> <p>私が医学部の学生の頃は（30年以上前）、このようなハイテクは無かったので、解剖学のテキストを見ながら頭の中で一生懸命に立体画像を再構築していた。現在は便利なものが色々あるので、学生達がこれらを利用できるような環境作りを大学側としても積極的に進めて欲しい。</p>				

授業形態	演習	科目名	初期演習	必選区分	必修
開講学科・学年	大護1年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を 取り入れたか	<p>新設された学部 of 1 期生を対象とするため、初期演習の初回にて、「武庫女看護の顔となる 1 期生として、どんな学年になりたいか?、周りからどのように見られたいか?」と投げかけ、「1 期生のテーマ」を考えるグループワークを行った。</p> <p>①クラスにかかわらず知り合い学年全体の結束を高めること、②お互いに楽しみながら学科の特色について語り合うことの 2 点を意図して、A B 両クラス合同で行い、両クラスの学生が半々になるように 5 グループを作った。また、座席は A B 両クラスの学生が交互に座るようにした。</p> <p>グループワークでは、①自己紹介、②どんな学年になりたいか、どう見られたいか、をまず各人が発表した。続いて、その情報も踏まえううえで、③ 1 期生のテーマ、④そのテーマに沿う学年になるために自分たちが大切にすること、をグループでディスカッションした。</p> <p>最後に、グループごとにその内容を模造紙に書き、発表してもらった。</p>				
取り組みの効果	<p>はじめは、やや緊張した様子であったが、自由にグループワークをしてもらうと、ユニークな意見が出て笑いも起きはじめ、和やかな雰囲気になった。グループワークの時間も限られていたため、両クラスの学生が協力して行っていた。</p> <p>発表方法も、メンバーで掛け声をだしたり、模造紙にラビーを描いて注意を引いたりするなど各グループ工夫を凝らしており、自分たちの決めたテーマに愛着を持っている様子であった。ワークを通して、それぞれが、自分たちがどのような学年になるか意識して考えていた。</p>				
今後の課題	<p>初回ということもあり、指示を出されても、その注意書きまで読んで自分から動く姿勢は学生に不足していた。そのため、座席についての指示をよく読まず、一部のグループでは、はじめ A B のクラス別で分裂して輪を作り、グループ全体でのディスカッションをする態勢になっていなかった。</p> <p>とくに初回は指示を細かく読み上げるなど、全員がワークの進め方を理解できる工夫をしていく必要があると思われる。</p>				

授業形態	講義	科目名	高齢者看護学概論 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科1年		受講者数	約120名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を 取り入れたか	<p>①初回授業から最終授業日までの期間において、新聞から高齢者に関わる記事を週3件以上収集させた。</p> <p>②1ヶ月単位で収集した記事の概要をまとめさせ、授業内容を関連させながら、1ヶ月間に起こった記事に関して感想を書かせた。</p> <p>③最終授業日に、初回授業から1ヶ月毎にまとめた記事を各自が持ち寄り、収集した記事が個人の興味・関心に偏らないように、グループ内で家族・健康・生活・経済・環境・介護等に分類させた。</p> <p>④分類した記事について、授業の内容を踏まえ、なぜこのようなことが生じるのか、どのような対策が考えられるのかディスカッションを行った。</p> <p>⑤最終的に、授業・収集した記事の分析・グループ討議を踏まえ、「高齢社会における課題と対策」についてレポートを提出させた。</p>				
取り組みの効果	<p>①普段新聞を読む機会がないため、高齢者の記事だけではなく、社会情勢についても理解することができていた。</p> <p>②成年後見制度等、学生が理解しにくい制度についても、実際に制度を活用した記事が出てくることで、授業への関心や復習へとつなげることができていた。</p> <p>③健康を害した高齢者だけではなく、地域で活動的に生活されている高齢者についても理解することができていた。</p> <p>④家族形態の変化や認知症高齢者の増加、医療費や介護費の増大など、高齢社会における課題について、個人学習とグループワークを通して考察することができていた。</p> <p>⑤概論の授業は抽象的方法論の授業に比べると、学生の学習への意欲が低くなりがちである。自ら情報収集することで、その記事の事柄を授業でつなげられるため、帰納的な授業への取り組みによって意欲や関心を高めることとなった。</p>				
今後の課題	<p>①1ヶ月毎に収集した記事について感想を書くのではなく、記事毎に感想を記載している学生がいたため、課題の提示を明確に行う必要がある。</p> <p>②自らテーマを設定して、関連記事を収集していた学生がいたが、グループワークで情報を共有し、様々な分野について収集した方が授業と関連させやすかったという感想を述べていたため、授業への意欲・関心を高めるためには、漠然と「高齢者に関する記事」を収集させるのではなく、項目別に収集させる必要がある。</p>				

授業形態	講義	科目名	基礎看護学Ⅳ－２（検査・薬物療法） （前任校科目）	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学部 1 年		受講者数	約 100 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他（ ）				
どのような方法 を取り入れたか	<p>事前課題を出し授業資料を穴抜きにし順番に発表していく形態をとることで、教員の一方的な講義ではなく、皆が積極的に授業に参加できる講義を心がけた。講義の中で処々に学生への問いかけを含め、授業内容を普段の身近な生活に置き換えて考えてもらうことにより、難しい内容であるが自分なりにイメージできるように工夫した。また医療事故の話をする際に、自分が病院で看護師をしている際に実際に経験した事例を話し、実際に起こりうる事故を想像してもらい、故に注意しないといけないということが記憶に残るように工夫した。講義・演習において重要なポイントは繰り返し学生に答えてもらい、体で覚えるように心がけた。点滴挿入中の患者の看護においては実際に学生に看護師役・患者役をしてもらい、教員が促すのではなく学生の自由な体験・思考ができるように演習を工夫した。また講義・演習後に小テストを実施し知識が定着するように工夫した。</p>				
取り組みの効果	<p>難解かつ盛り沢山の授業内容であったにもかかわらず、授業中寝たり授業に集中できていない学生はいなかった。学生が自分達で考えたり体験することを大切に実施したことが影響したか、学生が皆積極的に講義・演習に参加し、教員が想像していなかった意見や考えが生まれた。</p>				
今後の課題	<p>授業時間に対して授業内容が多く、事前課題・講義・演習・小テストと学生の負担が大きく小テストをしても全体的に成績は思わしくなかった。授業内容の整理と学生の能力を踏まえた上での授業形態を検討する必要があった。</p>				

授業形態	講義	科目名	成人慢性期看護援助論 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護2年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>看護学部のカリキュラムは、1・2年次に専門基礎科目（解剖学、生理学、疾病論、薬理学等）を学んだ後、2・3年次では専門科目（看護学）を学習する組み立てとなっている。当事例は、専門科目における事例である。</p> <p>講義前までに、その講義に関連した解剖学、生理学、疾患、症状、検査、治療を事前課題としてレポートさせ、講義に臨む形式をとった。たとえば、「心不全の患者とその家族への看護方法」を教えるときは、心臓や血液循環に関する解剖・生理、心不全の症状、検査、治療について、事前準備をさせる。</p> <p>看護を学ぶためには、その疾患のメカニズムや症状、病気のありようがわかっていることが必要条件となる。90分の授業時間の中で、それら全てを教授するのは不可能であるけれど、低学年で学修した専門基礎科目を復習しておかないと、当該科目をスムーズに理解することができない。そのために事前課題を出し、看護を学ぶ準備を直前でさせた。</p>				
取り組みの効果	<p>講義への理解度を高めることのほか、自己学習を積み重ねることを低学年から習慣付けることも目的としている。</p> <p>レポートの作成は大変だけれど、きちんと自分で調べこつこつと手書きで仕上げたレポートは、講義だけでなく実習時にも、そして国家試験対策にも活用できることを伝えている。それゆえ、レポートは教員のために書くのではなく、自分のためであることを繰り返し強調している。</p> <p>その本質がわかっている学生は、自分だけのノートを作成し、系統立てた学修の積み重ねが身につけていった。</p>				
今後の課題	<p>他の科目の学修とも並行して週に一度のペースでレポートを作成するのは、大変だったと思われる。</p> <p>中には、レポートが教科書やインターネットの丸写しをしている学生が見受けられ、そのような学生に、いかにして自分のために学修するかということを理解させることと、その方法を自ら身につけられるよう介入することが課題である。</p>				

授業形態	講義	科目名	基礎看護技術（前任校科目）	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科2年		受講者数	約80名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> その他（論理的思考を養うための取組み）				
どのような方法を 取り入れたか	<p>【演習授業に提出させるレポートについて】</p> <p>1. レポートの内容:演習項目、演習目的、演習方法、演習結果（評価）、考察および、文献を一連のものとして記載し提出させる。</p> <p>2. レポートのねらい:基礎看護技術の演習レポートは本授業の終了時には学生一人当たり15枚程度提出している。本レポートを書くことで、論理的な思考展開を習慣化させて身につけさせることをねらいとしている。</p> <p>3. レポート指導:レポートの書き方は最初の授業時に説明し、最初のレポートが提出された後にレポートの書き方が不十分な学生には個別に指導を行う。</p> <p>註:「基礎看護技術」は、学生が患者役と看護師役になり、看護として提供する技術を実際に体験して習得する授業（演習）である。展開する看護の方法を、物理学や人間工学の理論や家政学的な理論などを用いて説明を行うものである。看護の実際を体験し、どのような患者の看護にも応用できる実践能力を育成する。</p>				
取り組みの効果	<p>毎週演習レポートを書いているので、論理的な思考展開が習慣化されて養われ、看護をする上での判断力や実践能力が育成できた。また、論理思考に基づく研究過程も円滑に進めることができた。日常の教育の中で習慣化させることで効果が発揮できたと考える。また、演習単位の考え方からみて、レポート作成が自己学習時間となるので、本来の教育単位の意味合いが達成できると考える。</p>				
今後の課題	<p>レポートの作成は学生には負担感が強いようであるが、その意義などを十分に伝えることが必要であると思われる。感覚的には効果はあると思うが、レポートに対する成果をみる比較研究ができていく現状があり、課題でもある。</p>				

授業形態	講義	科目名	看護情報論（前任校科目）	必選区分	必修
開講学科・学年	保健学科2年		受講者数	約80名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他（ ）				
どのような方法を取り入れたか	<p>・システム思考の学習のため、「ビールゲーム」という参加型演習（ゲーム形式）を導入。学生4名1組となり演習実施、演習後グループワークをして演習から学んだことを学生同士で意見交換した。その後理論的な補足を講義で行い、演習及び講義で学んだことをまとめるレポートを課した。</p>				
取り組みの効果	<p>・学生は関心をもって講義を受けており、グループワークを通して活発な意見交換をしていた。</p> <p>・体験に基づく学習から得られた学びを、授業後半の講義にて体系的にまとめることで、この学びが具体的に臨床場面でどう活かされていくか理解が進んでいたものと思われる。</p> <p>・講義の補足として挙げた参考資料を読んだ上で作成するよう課したレポートでも関連文献を自発的に読み学びを深めた学生もいた。</p>				
今後の課題	<p>・ティーチングアシスタント（大学院生）をファシリテーターとして育成し、演習が円滑に進むよう支援していく必要がある。</p>				

授業形態	講義	科目名	国際看護学 (他大学での担当科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科2年		受講者数	約120名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法 を取り入れたか	<p>原因と結果の関係と結果を変えるための考え方について教授方法を工夫した。看護の原点である「なぜだろうか」という考えは日常のどこにでもある疑問であり、それが人の生活と結びつくとうなるかを考えることを大切に教育してきた。</p> <p>実際には、ある物語（ラテンアメリカに住む7歳の少年が破傷風でなくなる物語）を読み、引き起こされた一つの現象（死亡という結果）が生活とどのような因果関係を持つのかを考えさせた。</p> <p>第一段階として、なぜ少年は死亡したのか、その直接的・間接的原因をすべて列記させ、それらの原因がどのように繋がっているのか、関連図を描くことで可視化した。</p> <p>次に、なぜ死はこの少年に訪れたのか、第2の少年を出さないためには、具体的に何をどうすればよいのかをグループディスカッションを通して考える。その際、作成した関連図を見ながら討議させ、常に現実と対峙することを意識した。</p>				
取り組みの効果	<p>結果という現象を食い止めるための具体的な対策を考えることで、因果関係を理解し解決策は今日からでもできるものと政策として行うべきものまでであることに学生は気づくことができた。</p> <p>この思考プロセスを通して、学生の看護に対する興味と関心をひき寄せることができた。</p> <p>また、「自分で考えることができた」、「順序だてて考えられた」という学生の声もあり、論理的思考のあり方を理解できるようになったと考えている。</p>				
今後の課題	<p>じっくり考えるにはグループ数が多く、時間が少ない。そのため、積極的になれない学生への支援が必要である。</p> <p>学生が主体的に物事に取り組み始めた次のステップとして、自らの考えを発信できるように、発表する場を設けることも必要だと考えている。</p>				



授業形態	講義	科目名	成人看護学（急性）Ⅰ （前任校科目）	必選区分	必修
開講学科・学年	保健看護学部2年		受講者数	約80名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他（ ）			
どのような方法 を取り入れたか	<p>●危機的状況にある対象者と家族への援助を考える急性看護学の授業において、学生が自ら知識を学習し、焦点となる課題を見つけられるような授業方法を工夫した。</p> <p>●学生への学習喚起方法は、①事前に事例を配布、②事例を読み、わからない箇所を調べて理解しておくこと ③F i n kの危機理論の復習をしておくこと、④当日はK J法を用いたグループワークを行うことの事前告知とグループワークの流れを説明しておく、の4点であった。</p> <p>●グループワークの時間および発表時間をあらかじめ設定し、90分の授業時間内に終了させるよう、学生が主体となって時間管理できるようにした。</p>				
取り組みの効果	<p>●事前の自己学習量に差があり、話し合いを開始できるまでに少々時間を要したが、教員がファシリテーターとなり、引き出すよう援助すると、学生のみで積極的に模造紙に書き始めた。</p> <p>●事例の対象者にとって何が危機となっているのか、危機のどの段階か、看護者はどのように関わればよいか等について発表できた。</p>				
今後の課題	<p>一方的な授業では、学生の自主性・積極性・考える力を培うことは難しいので、今回の取り組みは良かったと考える。しかし、学生の身につく能力となるためには、P B L型授業を重ねていく必要がある。</p>				

授業形態	講義	科目名	成人看護援助論演習 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科3年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	(前任校にて)講義形式にて、成人看護の専門的内容を教授する目的で3年生前期に設定されている科目である。「成人看護」に関する内容は幅広いが、授業時間内である程度をカバーしようとするため、毎回の講義の内容が相当多い。そのため、少しでも理解しやすくすることをねらいとし、開講前の春休みのうちに、「事前学習」として、課題を課し、成績評価の一部にも含めていた。課題の内容は、講義の導入を補佐する目的として解剖生理学の復習が主なものである。一例として、「肺(胸郭)の解剖について、呼吸の仕組みについて、主要呼吸器疾患について」などである。				
取り組みの効果	学生によって課題に取り組む姿勢にばらつきがあった。課題について、いくつかの図書調べ、自分なりにまとめることができている学生は一部に留まり、多くが1冊の本の丸写しとなっていた(多くの学生が同じ本を参考にしていたため提出されてきた中身が同じであった)。また、「課題」=「ただ提出すればよい」との考えがあるのか、課題をこなすこと自体が最終目標となっている様子が多くみられた。「書くだけでなく、自分なりに理解しなくては意味がない」という課題の本来の目的を達成させるにはいたらなかったと考えている。				
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>●課題の取り組み方について、たとえば参考すべき図書の探し方、読み方(読みこなし方)、まとめ方(調べたことの統合の仕方)、レポートの書き方からの教授が必要と考えられ、低学年時からの学校全体での取り組みが必要ではないかと考えられた。</li> <li>●大学の授業時間は、学内での授業だけでなく、一定の時間外学習がなされることが前提の単位認定となっている。そのため、課題を課すこと自体は問題ないと考えますが、看護学部の特徴として、多くの専門分野が課題を出すため、学生の許容量を考えての科目間の調整ができれば理想的であろうと思われる(現実的にはその調整は難しかった)。</li> </ul>				

授業形態	講義	科目名	成人看護援助論 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	保健学科 3年		受講者数	約 80 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を 取り入れたか	<p>慢性看護援助論では、循環機能障害をもつ人の看護について、疾患から考えるのではなく、機能障害の観点から看護について考えられるように講義を行っていた。</p> <p>以前は、臨床でのエピソードを交えて看護の実際が想像できるように講義を工夫するようにしていたが、学生によっては難しく感じる人もいれば、退屈に感じる人もおり、学生のレベルに合わせた講義の組み立てが難しかった。</p> <p>新たに、講義の内容を踏まえて事例を作成し、自分ならどのような看護が必要であると思うかについて、ヘンダーソンの看護過程を簡易にした枠組みを作成し、個別に記載してもらう時間を設けることとなった。作成した内容は発表してもらい、学生全体で共有し、教員から補足のコメントを行った。さらに、看護過程の作成例を講義後に配布した。以上のことより、循環機能障害をもつ人についての理解を深め、実際にどのように看護を展開していくのかについて考えることで臨地実習にも役立つと考えた。</p>				
取り組みの効果	<p>授業を聴いているだけでは、学生のレベルによって退屈に感じる人もいたが、自分で看護を展開してみることは、個別の能力の中で考えられるという点ではよかったのではないかと考える。また、考えた内容を共有することで、難しいと感じる学生にとっても考えるヒントが得られたのではないかと考える。</p> <p>授業アンケートでは、一方的に講義を聞くよりも自分で考えることの方がおもしろかったという意見がみられた。また、患者の情報をどのように活用して看護を行うのか、そこからどのように判断するのか理解できたという意見も聞かれた。</p>				
今後の課題	<p>事例を用いて看護を展開する試みは、学生のレベルに応じて自分で考えることができるという点では、よかったと考える。しかし、講義だけでは退屈に感じたり、難しく感じていることがあったため、重要なポイントは押さえつつ、講義の中に、なぜ、どうして、と考えられるような内容を入れるなどの工夫ができるよう検討していきたいと考える。</p>				

授業形態	講義	科目名	母性看護学概論 (看護専門学校での担当科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	2年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	<p>毎回、90分授業の半分を講義、半分を講義内容に関する短い読み物（新聞記事やエッセイなど）を読んでそれに対するディスカッションを5名程度のグループに分かれて行いました。グループの意見を最後に発表し、共有しました。慣れてきたら、学生に司会と書記をしてもらいました。</p>				
取り組みの効果	<p>ディスカッションを通して、他者の価値観を知ることができ、また講義内容と関連づけて理解を深めることができました。また、グループディスカッションの経験をつむことで、病院実習でのカンファレンスの持ち方に活かすことができたようです。</p>				
今後の課題	<p>ディスカッションの題材となる読み物が長すぎて読むのに時間がかかり、グループワークの時間が十分にとれないことがありました。長い読み物は宿題にして読んでもらうなどの工夫をしたと思います。また、クラスの雰囲気などによって、ディスカッションに熱心に取り組まない学生がいて、まじめに取り組みたい学生にも影響を与えてしまうことがありました。興味をひくような内容を考えることに加え、グループによっては教員がファシリテートする必要があると考えます。</p>				


授業形態	演習	科目名	看護過程論演習 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	2年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例に基づく思考過程の展開であるので、段階的に各学生が体験的に進めていけるように、講義や解説と実際の課題ワークを段階的に順番に実施していく構成とした。</li> <li>・各自の課題ワークを進める中で、不明な点や分からない点などが出来た場合には、その理解を助ける情報や解決するための方法に関する解説を加え、個人の疑問を全体で共有して課題ワーク進行の方法とモチベーションの両面へのサポートを行った。また、具体的な書き方の例や表現の例などを入れて、書き方のイメージが抱けるようにサポートし、自分なりの思考プロセスが踏めるようにした。</li> <li>・学生のワーク進行度によって、複数の教員でラウンドも行い、不明な点の個別指導を実施した。</li> </ul>				
取り組みの効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体例を入れながら段階的に進め、各ステップごとのゴールを示すことで、学生の課題に対する集中度は概ね維持できていた。</li> <li>・情報収集から分析、問題の明確化や看護計画までの一連の流れで体験的に実施していくことで、どのようなアセスメントの書き方をするのかなど、基本的な記録の記入方法は理解できていた。</li> </ul>				
今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報を収集してその情報を解釈し、その状態に対してネーミングしていくという思考のプロセスは、答えが完全に一つではない内容のものであるので、最終的なところで何をゴールにするのか、教員間で統一できていなかったことから課題ワークの最終段階の到達度に個人差が出てしまった。演習形式で課題ワークを進める場合には、統括する教員が学習到達度を最終的にどこに設定しているのかを分担者に適切に伝達し、共有する必要がある。</li> <li>・使用する事例教材の事例としての限界（情報不足など）、学生の思考の傾向や準備状態などに関連し、学生がつまづきやすい課題とそのときのサポートの方向性などを共有しておく必要があった。</li> </ul>				

授業形態	演習	科目名	老年看護学対象論 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科2年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>テーマ「今の90歳の方たちが歩んできた時代背景」</p> <p>老年期にある対象者の理解を深めるため、現在90歳の高齢者を機軸として、その方達が歩んできた時代背景の理解を深めることを目的として授業を行った。内容としては、年代ごとにその時代背景を「あそび」「政策」「食事」「教育」「生活」「健康」の分野に分け、授業のコマ内でグループワークをした後、時間外でグループ学習をしてもらった。最終的には最初に説明を行った約1ヵ月後に順次授業内で発表し、発表内容に対して、学生による評価をしてもらった。発表はパワーポイントで行うこととし、配布資料も枚数を指定した。</p> <p>発表時間は7分、質疑応答3分、グループ全員で課題に取り組みすることも必須であることを説明した。</p> <p>学生には参考資料として、図書館の本を紹介するとともに、老年看護学領域で所有している昭和、大正時代の資料も貸し出しを行った。</p>				
取り組みの効果	<p>各グループそれぞれ資料とスライドを作成し、学生なりにわかりやすく工夫をして発表していた。資料も充実しているものも多く、自分が生まれる以前の時代がどのようなものであったか理解は深まったと考えられる。しかし、グループによって資料の充実度合いに差がみられた。また、発表時間等は指定していたが、形式まで指定していなかったため、一人の学生が全部発表するグループや交代で協力して発表するグループなど様々であり、グループ全員が協力していたかどうかは不明であった。発表中、特に「あそび」のところでは、自分たちが幼少のころに遊んでいたおもちゃなどが紹介されると盛り上がり、私語が多くなるなどの様子が伺えた。</p>				
今後の課題	<p>1. 評価について： 授業内で課した評価は他のグループに対してのみであったが、自己評価としてグループ内の協力度や資料やスライドの完成度なども入れたほうが教員も学生の協力の程度が把握できるとともに、学生の振り返りの機会ともなったと考えられる。</p> <p>2. 高齢者の時代背景に関する理解度について： 自分で調べることにより、単に講義を受けるだけより理解が深まったと考えられるが、学生にとって「90歳の高齢者」は具体的なイメージがつきにくく、単に歴史の学習となってしまった可能性がある。実際の高齢者からの生の語りなどを取り入れ、内容からわからなかったことを調べていくという方式をとってもよいと考えられる。</p>				

授業形態	演習	科目名	在宅看護学演習 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科2年		受講者数	約80名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法 を取り入れたか	<p>訪問看護過程の講義の前段階として、在宅で生活（療養）する対象者の理解を深めていくために在宅看護実践のプロセスをたどりながら、考察を進めた。（事例・ワークシートは教員が作成した）</p> <p>具体的には、</p> <p>一人暮らしの男性の事例を用い、在宅の訪問実習で学生が始めて療養者の家に訪問し、その療養者と会話するという内容のワークシートを用い、自らの気づきや感じたことを記述し、次にグループワークで共有するという形で段階的に進行していった。</p> <p>事例を読み進めていくうちに、場面ごとに、療養者の発言の意味や思いが明らかになっていき、学生の療養者への視点の傾向を気づいていくようにした。</p> <p>場面ごとに区切り、場面の展開した事例のワークシートを配布し、考察、グループワークを繰り返した。</p> <p>小グループごとに、気づいたこと、理解したことを発表したのち、教員が解説を加え、最終的にはレポートを提出させた。</p>				
取組みの効果	<p>段階的に会話が進んでいくことから、学生は、集中的に授業に取り組んでいた。</p> <p>会話の流れの中から、人それぞれに歴史や思いがあることなど考察することができ、家で生活することの意味や対象者の理解につながっている。また、ワークシートを進めていく中で、学生は、在宅の療養者の発言から自分自身がどのような感情を持つのかを自覚することや、ひとつの事例を他者と共有することにより、人それぞれにその感情が異なることを考えるきっかけとなっている。</p>				
今後の課題	<p>事例を場面ごとに展開し、そのたびごとにグループワークを行って、最終的に発表を実施するが、時間が不足する。</p> <p>ワークシートに一人で記述し、その後、グループワークを実施しているが、学生からは、もう少し、グループワークの時間がほしいとの意見もある。しかし、ワークシートに記述する時間を短くすれば、自らの考察が深まらない可能性もあり、時間配分が今後の課題である。</p>				

授業形態	演習	科目名	成人看護学演習 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	その他(患者の制限ある生活を少しはイメージできる)			
どのような方法を 取り入れたか	前任校の実施した内容です。糖尿病患者の血糖自己測定に関する演習後、課題として、学生に血糖測定器と針など持ち帰らせ、ある1日、4回の血糖測定(指定した時間)を実施してもらった。そして、測定した血糖値結果と、測定前の食事や活動との関連をアセスメントしてもらい、レポートを提出してもらった。				
取り組みの効果	この演習の目的は、①課題を通して技術を繰り返し復習する機会をもつことで、血糖測定技術を習得してもらうこと。(演習だけでやりっぱなしにしない)、②患者さんは、毎日、数回の血糖測定を実施していることを理解する。つまり、針の痛みや毎回実施する面倒さを理解することにつながる。③血糖測定をする意味を理解する。血糖値が食事や活動などと関連していることを理解する、④測定結果をわかるように表記することを学ぶなどである。取り組み効果は、課題直後において①と②はあり。しかし③は健康な学生はインスリンが十分に分泌しているので、血糖値は基準値内であるためにアセスメントが難しい。④は1日の表記では難しい。				
今後の課題	①や③については時間経過とともに、忘れてしまう。今後忘れても、自己学習できるモチベーションと方法を検討要!しかし、②の患者の痛みや毎日実施する面倒さを体験することで、患者さんの状況を理解するには、有効な方法だと思う。				



授業形態	演習	科目名	小児看護援助論 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年		3年		受講者数	約100名
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法 を取り入れたか	<p>小児の腕モデル（子どもの点滴挿入を練習するためのゴム製の手のモデル）を用いて、小児看護学の学内演習を行なった。前回の講義の最後に次回の予習として、「小児の点滴固定の完成図」を書くことと、大学のサーバーにアップロードした点滴の挿入と固定の方法の自作の動画を、1回は見ってから参加するようにと説明した。さらに実際に動画へのアクセスする方法を説明した。</p> 				
取り組みの効果	<p>演習当日、演習前にどの程度の学生が動画を見たのかを確認したところ、動画を見た学生は1割程度であった。一方、課題として「小児の点滴固定の完成図を書いてくること」はテキストを参考にしてほとんどの学生ができていた。点滴固定の演習は動画を見ていなくても当日のデモンストレーションを見て、指導を受けることでほとんどの学生ができていた。</p>				
今後の課題	<p>多くの学生にビデオを見せたいのであれば、動画を見なければ完成できないような課題や演習内容とするべきであった。また、他にも多くの課題があったため、課題の量を整理することも必要であった。</p>				

授業形態	演習	科目名	成人看護学実習 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	看護学科3年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を取り入れたか	<p>看護学教育における臨地実習は、学生にとって大きなストレスや緊張をもたらします。成人看護学実習（慢性）の場合、学生の受け持ち患者が、内視鏡治療やカテーテル治療を受ける当日の実習は、さらにストレスや緊張度も高くなります。その要因として、治療前の緊張した患者様と接すること、内視鏡室や血管造影室など病棟と異なる環境で実習をすること、治療直後は副作用の異常の早期発見や苦痛の緩和のために、同時に様々な看護が展開されることなどがあげられます。またそのような治療は、患者の受け持ちが始まって、まもないことが多いです。そこで上記で述べた要因について、学生の中でうまくイメージ化できれば、その日の実習は緊張して何がなんだかわからなかったという感想で終わらず、少しでも達成感を感じる実習になるのではないかと考えました。方法としては、同じ実習病棟の学生の中から受け持ち患者様の身体状況を想定した患者様役を1人決め、実際にその患者様を受け持つ学生が看護師役となり、治療直前、治療中、治療直後の看護について、具体的な観察項目や看護ケアの実際を体験してもらう方法です。まず、学生が事前学習で学んだ内容もとに行ってもらいます。その後教員は、必要な観察項目や看護ケアの内容の記載した資料を学生に配布し、補足説明をしていきます。そうすることで、学生は実習当日の看護場面を、より具体的にイメージ化することができるのではないかと考えました。</p>				
取り組みの効果	<p>学生の実習記録や実習終了後の自己評価の内容、学びの発表などから、この方法を肯定的に受け止めていたり、達成感につながったという意見が多かったです。</p>				
今後の課題	<p>現在、実習病院として使用する病棟の患者様の状況はまだ把握できていないため、情報収集ができた段階でこのまま方法を取り入れることができるのか検討していきたいと考えております。</p>				

授業形態	演習	科目名	生活援助技術演習 (前任校科目)	必選区分	必修
開講学科・学年	—————		受講者数	約 80 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を 取り入れたか	技術演習項目の自己学習を促すために項目ごとにピア評価表を作成し、演習時間外にペアもしくはグループで自己練習することを課題とした。				
取組みの効果	ピア評価表の評価項目の評価を○△×で行うようにしていたが、評価者の基準がばらばらであることと、自己学習で教員が立ち会わないことから教員が求めている基準と合っていたかを把握できなかった。学生は自己学習に取り組んでいたが、これによって演習項目が格段に上達したとはいえない。しかし、評価項目にそって自己学習を行うことにより、授業のとき聞き逃した注意点やポイントを把握し、演習最中には習得できなかった技術を見直すことができたということに関しては効果的であった。				
今後の課題	今後の課題として、まず、評価基準の明確化を行うことが必要である。また、自己学習が技術の習得に効果があるということを学生が納得できるように、姑息的ではなく継続的に練習を重ね、習熟していくような方法を考えること。さらに、課題を課しても実際に身につくようにできているかどうかを教員が実際に自己学習の場に行き、評価ができるように工夫していくことが必要である。				